

# お薬のしおり

## 授乳とくすり

No.90 (H21.4)

東京医科大学病院 薬剤部

赤ちゃんが生まれてから初めて口にする栄養源、それが母乳です。特に分娩後の数日間に出る母乳は初乳しよにゅうといって、赤ちゃんを感染から守る役割も果たしています。

母乳は赤ちゃんにとって栄養の基本です。赤ちゃんが育つのに必要な栄養素を含み、消化と吸収がよく、内臓に負担をかけないという利点を持っています。さらに赤ちゃんが母親の腕に抱かれ、人とのコミュニケーションの心地よさを感じることで、人に対する信頼感が育まれます。授乳中の母親の脳波はとでもリラックスしている状態を示していて、母乳育児は赤ちゃんだけでなく母親の心の健康にもよい影響を与えていると考えられます。

このように母乳で育てられればよいのですが、授乳期の母親が病気の治療のために何らかの薬を使わなければならないこともあります。そんな場合、薬を飲みながら授乳してもよいのでしょうか？ という質問を受けることがあります。

ほとんどの薬は飲むと母乳の中に分泌されます。これだけ聞くと、薬を飲んだら授乳は止めなければいけないと思うでしょう。しかし、実際には薬を飲んでいる間でも赤ちゃんに母乳を飲ませても問題にならない薬がたくさんあります。それは、

母親の体内から母乳に移行する薬の量はわずかであること

実際に赤ちゃんが薬を含んだ母乳を飲んでも有害な症状がでにくいこと

もし何らかの有害な症状が出て一過性の軽い症状で済む場合が多いこと

といった理由からです。

もちろん、薬のなかには母乳中に移行しやすい薬、移行する量は少なくても授乳によって赤ちゃんに重い症状をもたらす恐れのある薬もあります。そのような薬を飲むときは、薬を飲んでいる間と薬を飲み終えてから薬の成分が母親の体の中からなくなるまでの間は授乳を中止しなければなりません。



以下に授乳を中止すべき薬の一例を紹介します。

### 授乳期に服用したとき、何らかの影響が報告されている薬剤の一例

成分名	代表的な商品名	効果・効能	乳児、母親への影響 及び報告例
エルゴタミン	カフェルゴット	片頭痛治療剤	嘔吐、下痢、けいれん
炭酸リチウム	リーマス	躁状態治療剤	チアノーゼ*1、体温低下
プロモクリプチン	パーロデル	パーキンソン病治療剤	母親の乳汁分泌抑制
カベルゴリン	カバサル	パーキンソン病治療剤	母親の乳汁分泌抑制
フェノバルビタール	フェノバル	催眠・鎮静・抗けいれん剤	傾眠、哺乳量低下
ジアゼパム	ホリゾン	抗不安剤	嗜眠*2、乳児の体重減少

\*1 血液中の酸素濃度が低下して皮膚や粘膜が青紫になる状態。

\*2 常に睡眠状態に陥っている状態。

表に載せた薬剤はあくまでほんの一例ですので、この表にない薬が全て安全という意味ではありません。その他、抗がん剤や免疫抑制剤、放射性物質は表には載せていませんが、授乳を中止する必要があります。

日本では赤ちゃんへの影響を心配しすぎて必要以上に授乳を中止する傾向があります。授乳することは赤ちゃんの栄養面だけでなく母子間の愛着形成を促進し、母親の情緒を安定させる効果があります。そのため、安易に授乳を中止することは避け、医師としっかり相談して治療していくことが大切です。また、授乳をしたいからといって処方された薬を飲むことを自分の判断で止めないでください。無理をして薬を飲まないで病気が安定せず、育児にも影響してきます。

年々、母乳育児を希望する家庭が増えてきています。母乳育児の利点がわかってきている一方で、数時間ごとに必要となる授乳が母親の負担になり、体調に影響を与えることもあります。赤ちゃんのこと、母親のことをそれぞれ考えながら正しく治療することが大切です。母親の健康が赤ちゃんの健康にもつながるということを常に考え、授乳の必要な方が薬を使用するときは必ず医師・薬剤師に相談するようにしてください。

